

だいちゃんの大冒険シリーズの2  
～樺太編～



～西風 そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

凍てつく風の中、だいちゃんは独り、崖を登っていた。吹き下ろす風に何度も引き剥がされそうになりながら。凍った岩をかじかんだ指が掴む。

「待っていて、柿ただちゃん！」

\*\*\*

さかのぼる事数日。

「本当に柿ただちゃんってタフだよな」

まずはアムール河の源流を目指す事にした三人は、平和にtekutekute歩いてた。

柿ただちゃんは、樺太に来る前、随分ハードな風袋の特訓を受け、休まず飛んで来て、だいちゃんを見つけた後はずっと樺太ただちゃん達のお仕事を手伝っていた。今だって、全然疲れたぞぶりを見せず、全開でお喋りしている。

「疲れを知らないっていうの？」

「あら、ただちゃんは……」

声はそこで止まった。

「……」

二人が振り返ると、柿ただちゃんは笑った顔のままポテンと倒れた。

タフって訳じゃなかった。限界来るまで自覚しないタイプだったんですかあ〜？

「体力が弱っていて凍み柿になりかけとる。そもそも寒冷地に弱い柿の精が何でこんな所におるのかね？」

医学の心得があるという海豹の爺を頼って行ったら、こんな事を言われた。

二人は返す言葉もなかった。言われるまで気が付かなかった。柿ただちゃんは氷温を保った氷室に寝かされた。中途半端に解凍すると、ふよふよになって逆に危険らしい。氷室が溶ける春までに、凍み柿を治す方法を見つけあげなくては！

二人はあちこち聞き回った。色んな種族に頭を下げて教えを乞うた。そして、地平線が暮れない山、白夜山に、どんな症状も治せる果実があるらしい、という噂にたどり着いた。

白夜山はすぐ見付かったが、風すっかは、何回飛んでも風に煽られ、地面に叩き付けられた。

「この山は自分の手足で登る者しか受け入れないようだね」  
だいちゃんが崖を登る事にした。

\*\*\*

「だいちゃんの手足の感覚がなくなってもうろうとした頃、ようやく山頂にたどり着いた。しかし風が地面を凍らせているだけで、何も無い荒地だった。」

「ガ…セ…ネ…タ……」だいちゃんはしゃがみ込んだ。

「だめ！ こんな所で挫けてちゃ、絶対諦めない、諦めないー！！」

だいちゃんがほっぺをパンパン叩いて立ち上がった時、彼方に見える水平線の白い帯に黒い点が現れた。思わず目をこすった。だってそれはどんどん大きくなって、ヒトの形に見えて来たんだもん。そして位置関係を無視して、あつという間にすべそこにやって来た。

「だいちゃんは背筋がぞわぞわした。ウミウシの上に入った白い髭のお爺さん！ 有り得ないでしょー！」

「おやおや、こんな寒い季節に、こんな何も無い山に登って来るとは物好きじゃのう」

「僕…、僕の病気を治す果実を探しに来たんです」

「ああ、『青い実』の事かいのう」

「それ！ 何処にあるんですかー！」

『青い実』はもう存在せん。百年程前にはここにもたわわに実っておったものじゃがのう」

「ああ……」

「だいちゃんはへなへなと崩れ…かけて、また立ち直った。まだまだがっくりしている暇なんか無い。」

「僕、どうしてもどうしても友達を助けたいんです。青い実、ホントに本当に何処にもないんですか？」

「ふむむ……」

「お爺さんはウミウシを見下ろした。ウミウシはちょっと面倒臭そうに触觉を揺らした。」

「ここに乗りなさい」

「お爺さんはウミウシから降りてだいちゃんを促した。だいちゃんは素直に従った。」

「ウミウシのくまぐまにのしかけた背中に入った途端、周囲がぐるぐると回った。荒涼とした景色が一瞬で緑に変わった。」

「だいちゃんは目玉をはちくりした。灰色だった空は青く暖かく、何処かで雲雀が鳴いている。目の前の地を這うツタの緑の葉の間に、砲丸のような青い実が輝いている。」

「あ…あ…あ……！」

「だいちゃんは嬉しさと感謝ではち切れそうになりながら、青い実を一つもいだ。そしてまたウミウシの背中に乗った。

「もう、帰るのかい？」

ウミウシが急に喋ったので、だいちゃんはしゃっくりが出たが、青い実をしっかりと抱きしめて何度も頷いた。

ウミウシは首を伸ばしてだいちゃんをねめつめた。

「青い実は超貴重品、喉から手が出る程欲しがらぬ奴はわんざかいるぜ。余分に持って帰れば随分イイ思いが出来るってもんだ」  
だいちゃんはウミウシの言っている事をよく理解出来ない自分を、馬鹿かも…、と思ったけれど、自分の考えを素直に伝えた。

「柿ただちゃんが元気になる以外のイイ思いつて、僕、考え付かない」

ウミウシはちえっ…と舌打ちして首をすくめた。

「必要以上に採ろうとする奴は、喰っちゃまっていい事になってくるのじ」

「え？」

また景色がぐるんと回って、お爺さんのいる荒れ野に戻った。

「戻って来たね、戻って来られると思っただけじ」

ウミウシは知らん顔でお爺さんに乗せた。もしかしてウミウシは喋れる事を隠しているのかもしれない。言うべきなんだろか？ そんなだいちゃんの心を知ってか知らずか、お爺さんは続けた。

「かって万能薬である青い実は、本来の目的以外に乱獲され、絶滅してしまった。それぞれの大切なヒトを助ける為だけにモギ取られるなら、青い実はいつても有り余る程にあつたのにな」  
だいちゃんはお爺さんとウミウシを交互に眺めながら話を聞いていた。

「絶滅を目前にした青い実は自衛策に出た。殻を厚く堅くして、生半可では中の果実を取り出せなくなったのだ。青い実を割る方法は自力で見付けなくてはならぬ。わしには教える事は出来ぬ。これは、時を渡って青い実を手に入れた者に課せられる、ペナルティなのだ」

だいちゃんは堅くしてつるつるの実の表面をじっと見つめた。

「まあ、わしを召喚出来たお前さんじゃ、頑張りなさい」

ウミウシは歩き出し、お爺さんはみるみる遠ざかった。

「あっ！だいちゃんは大切な事を忘れていたのに気が付いて、慌てて崖っぷちに走った。

「おじいさん、ありがとうー！ ウミウシさん、ありがとうと

おー！」

ウミウシのシルエットの触覚が少し伸びて、振ってくれたような気がした。

だいちゃんは懐の青い実を時々確かめながら、崖を降りきった。

風すっかが、寒風に曝されながら待っていた。青い実を見て、冷え切った身体でだいちゃんに抱き付いた。

海豹が提供してくれた横穴で、二人は身体を温めて食事をした。寂しさを紛らわせる為か、だいちゃんはいつもより良く喋った。

「その巨大ウミウシに喰われなくてよかったね」  
風すっかが首をすくめた。

「うん、僕、今日と言つ今日は、自分があまり賢くなくてよかったと思つたよ」

二人は久し振りに口を開けて、あはは、と笑った。

\*\*\*

青い実はどこにもなく、ぐちゃぐちゃでも傷一つ付かない。

「青い実は何百年前までは普通にこの辺にあったんだろう？」 長生

きしている者が知っているかもしれない。情報収集は僕の仕事、今度はボクが頑張る番だ」

風すっかは、へとへとになるまで飛び回って、青い実について聞き回った。しかし皆、首を傾げるばかりだ。

百年前まで重宝に使われていたのに、絶滅したらそんなにとこと忘れられてしまう物なんだろうか？ 歴史の中で、そうやってなかった事にされてしまった素晴らしい物が、どれだけあった事だろう。

疲れ切って浜辺に座り込んだ風すっかの耳に、無邪気な声が聞こえてきた。

ラッコの子供が二人、夕陽を受けてホヤでお手玉をしている。上手いモンだな……。何気なく眺めていた風すっかだったが、そのわらべ歌を聞いて、座っていた石からズリ落ちた。

♪ 青い実欲しけりゃカシラを使え      タマを差し出しゃ実は開く  
♪

風すっかは転がるように駆け寄って、ラッコの子供にもう一度唄ってくれるようにせがんだ。子供によそ者が近付いたので、大人のラッコ達も集まって来たが、風すっかはなりふり構わなかった。しかしわらべ歌の前後は「嫁」を欲しけりゃ錦を贈れ」

とか、青い実には無関係だった。

「この部分だけか…」

風すっかは洞穴に戻り、青い実との格闘に疲れ果てて引くく返っているだいちちゃんに、わらべ唄を教えた。

「分かったー」だいちちゃんはすくっと立ち上がった。

「死ぬ気で頭突きするんだ!!」

「……違うと思うよ、だいちちゃん…」

風すっかはわらべ唄を口ずさみながら、額に手を当てて考えた。言葉って、その土地土地で意味が違うんだ。知らない土地に行く事が多い風の精は、知らない言葉に出会ったら、早合点しないで、土地の者に聞く事になっている。土地の者にもっと聞かなくちゃ。

その時、入り口で気配がして、海豹の医者が顔を出した。干し魚を持って来てくれたのだ。

「青い実…? うっすら聞いた事があるな。どんな病も治せる万能薬だと。しかし、だいぶ前に絶滅したとか。どうやって手に入れたのかね?」

だいちちゃんは、白夜山であった話をした。

「言い伝えにある樺太賢者に会ったのか。求める者の強い心が

呼び寄せるという。なる程、よく会えたね」

「青い実の割り方、ご存じですか?」

「うーん、わたしには分からん。百年前まで存在していた物なら、

何処かにそのやり方が残っていきそうな物だが」

「このわらべ唄、どう思います?」

風すっかは海豹に唄を聞かせた。

「カシラ……、『おカシラ様』の事ではあるまいな?」

「なんですか? それ!」

\*\*\*

だいちちゃんは海を見下ろす崖の上に立っていた。

『おカシラ様』…海の中に巨大鮪まぐろの骨が横たわっているのが見える。その骨を『おカシラ様』と呼び、海豹達は昔から信仰していた。占いをしたり、儀式をしたりする時、その大きな頭の骨の中に入るといふ。

海豹の信仰の場所によそ者が近付くのはよくないだろうと、黙って朝早くに、カシラに近付く事にした。

「ごめんね、だいちちゃんにはかなり大変な思いをさせて…」

風の精は水に入れないので、風すっかは済まなそうに見送った。

「だいちゃんはシマシマ合羽を頭から被り、海にざんぶと飛び込んだ。シマシマ合羽の護りの魔法のお蔭で、そんなに冷たくないし、呼吸も出来た。」

カシラの正面まで泳ぎ着くと、カシラの目が光って、口がめくく開いた。恐る恐る中に入ると、口はすぐに閉まった。

「だいちゃんは奥へ進んだ。カシラの中は、人間が住める位の広い空間になっていた。なんてでっかい箱なんだ！ 真ん中、祭りに使われるであろう石の祭壇があり、海豹の神仏が奉られてる。」

部屋の奥…、隅の方に臼のような箱の奥歯が並んでいた。下の歯と上の歯の間は三センチくらい開いている。そしてそして…、下の奥歯の窪みは、青い実がピタリとハマる形ではないか！

「ま…さ…か……」

「だいちゃんはどきどきしながら青い実を懐から出して置いてみた。……何も起きない……。」

「そう都合良くは行かないか……」

「がっかりして青い実を取ろうとする……。」

「タマを差し出さなきゃ……」

甲高い声が出た。

「だいちゃんがきよろきよろしている……。」

「反対側の奥歯にも、青い実の対になるタマを置かなきゃ、上の歯は降りて来ないヨ！」

声の主は部屋の真ん中、カシラの喉仏にぶら下がっている、小さな小さなタツノオトシコだった。

「タマってどんなタマ？」

「アタタのあタマとめタマだよ!!」

「頭と目玉……」

「だいちゃんは反対側の奥歯に歩いて行って、自分の頭を乗せようとした。」

「おや、まあ！」タツノオトシコはぶらぶら揺れて頓狂な声を出した。

「アタタは自分のアタマと引き替えに青い実を割ろうってのかい？ そんな事したら死んじゃうじゃん。誰が割れた実を回収して必要なヒトに届けるんだ？ もしかしてオイラをアテにしてる？ バーカバーカ！ やなこった！」

「だいちゃんはムカッとした。けど、すべ風すっかに言われた事を思い出した。』自分だけで判断しちゃダメ、その土地の事は

そここの者に聞くのが一番。』

「ねえ、お願い、教えてくれない？」

「だいちちゃんはタツノオトシゴに近付いた。タツノオトシゴは探るようにだいちちゃんを斜に見た。」

「ここには色んな奴が来るけれど、オイラみたいなちっぽけな生き物にアタマを下げる物好きは、アンタが初めてだな」

「僕は、大切な友達に青い実の中身を届けたいの。僕の頭を差し出さないで青い実を割る方法はないかしら？　お願い、知っていたらどうか教えて」

「……まあ、あるヨ……」

「本当?!!」

「アタマの代替えにそこに乗せて、歯を動かせる物が、ある事はある」

「何?　教えて!」

「まあ…、ちょっとここっちへ来て」

「タツノオトシゴはだいちちゃんの質問には答えなくて、小さな尻尾でだいちちゃんを招いた。だいちちゃんが近寄ると、タツノオトシゴはぶら下がっているカシラの喉仏の骨を示した。丁度だいちちゃんの目の高さだ。」

「この喉仏をくすべると、カシラの口が開いてすぐに閉じるんだ」

「へええー!」

「オイラがアタマの代りになる物を取りに行つてやるから、アンタちょっと、その操作頼むわ」

「………?」

「カシラの前にオイラが戻つて来たら、口がカタカタ開きたがるから、そしたらまた喉仏をくすべつて開いてくれればいい」

「………」

「さあ、早く交代して」

「それって、喉仏の所に誰かいないと、カシラの口は開かないって事?」

「……まあ、そうだね……」

「最後は誰かがここに残らなきゃならない仕組みって事?」

「そー言うコト!!　オイラを信じられないなら、今すぐ出て行く方がいいや!!　ヒトが折角親切に言つてやっているのに!!」

「タツノオトシゴは小さな胸を反らせて、目一杯虚勢を張った。」

「その代り、アンタが出て行つても二度と口を開けてやんないからネ!!」

「………」





「……やっぱり、騙すつもりだったんだ」

「ちえっ、そうだよ！ あーあ…、思ったよりバカじゃなかったなあ」

「じゃあ、奥歯に置くアタマの代りになる物を知っているってのも嘘？」

「それは本当だよ、今更信じてくれないだろうっけね」

「ううん、信じるよ、だから僕が残って口を開けるから、それを取って来て」

「???…アンタ、バカか？ 今、オイラがアンタを騙そうとしたって告白した所だろ！ そのでっかい頭には又カ味噌が詰まってるのか？」

「ヒトに信じて貰いたかったら、まず自分が相手を信じるんだって、トモダチが教えてくれた。君を信じるから、君も僕を信じてくれる？ 僕、君がここから出られる方法を絶対者にするんだ」

タツノオトシコは喉仏から離れて、だいちゃんの方へ泳いで来た。そして黙ってだいちゃんの大きな目をまじまじと覗き込んだ。

だいちゃんがばちばち目をしばいたので、タツノオトシコ

はゆらゆらと揺れた。揺れながらも黙ってじっと考え込んで、それからぶっと眩いた。

「アタマとメタマって言ったろうっ。そしてタマを差し出すんだ、分かるかい？」

「へっ」

「謎かけなんだよ、考えてごらな」

タツノオトシコの声はさっきまでと違って、居丈高でなく、優しくなっていた。

「え…ど？ アタマとメタマ…、タマを差し出す？ タマを出す？ ア…メタマ…？ アメタマ！」

「そう、アメタマ、飴玉で良いんだ、主サマは甘党だったのさ」  
だいちゃんは力が抜けて顎が外れそうになった。

「そ…そんなに良いの？ 飴玉で？ そんな簡単な？」

「簡単って…、その答えにたどり着いたのは、アンタが初めてだよ」

「ええっ？」

「主サマは簡単には教えるなって言い残した。樺太賢者と何か取り決めがあったんだろ。オイフは言い付けを守っていただけなのに、ここへ来る奴に色んな目に遭わされた。アンタみたい

に普通に教えを求めた奴はいなかったヨ」

「……………」

今度はだいちゃんがタツノオトシゴをまじまじ見た。よく見たら、身体中に古い傷が沢山あった。

「それにはかばかしくなった」

「へっ」

「何でオイラがアンタのバシリで飴玉探しに行かにならんのよ。とっとと探しに行きなヨ。んで早く帰って来て、二人でここを出る方法考えてよね」

「えっ、じゃあ、信じてくれるの？ 僕の事」

「信じる、とか言う前に、アンタを疑う気になれないだけでよ」

……………ふう……………」

タツノオトシゴは喉仏の所に戻ってびらんとびら下がった。

「あのさ……………」

「何だヨ、早く出口に行けヨ」

「僕、だいちゃん、君の事は何て呼べばいいの？」

「オイラ…、名前なんかないヨ、あったかもしれないけれど、忘れた。だって、誰もオイラとマトモに話そうとしなかったんだから」

「じゃあ、僕が付けてあげようか？ 友達なのに、アンタとか

君じゃあ、おかしいもん」

「友達…って、いつの間にだヨ！ いちいち突っ込む気にもならんわ」

「どんな名前がいいかなあ？」

「勝手に話を進めるな！ 嫌だね、オイラ、名前を付けて貰うなら、可愛い女の子が良いネー」

「じゃあ、柿だだちゃんに付けて貰おうよ、今、病気で、青い実を待っている子だよ」

「その子、可愛いのか？」

「……………見方に寄っては……………」

「微妙なのか…、まあいいや、ほら、早く行けヨ。その子助けるんだろ、……………だいちゃん……………」

だいちゃんはタツノオトシゴの合図でカシラの外へ泳ぎ出た。やっこの思いで水面に出て、岸にたどりの着くと、風すっかがすくに飛んで来た。

だいちゃんは風すっかに、タツノオトシゴとの会話を余さず話した。

「あ、飴玉、持っているよ」

風すっかがポケットから新潟名産笹飴を引っ張り出した。

「新潟の風すっかの常備品」

「やった！ 後はカシラの口の脱出の問題だね」

「そうだねえ…、ねえ、これは使えないかな？」

風すっかは自分の跨った風袋を示した。

「スゥ」

「風袋は、声に反応するんだ、離れていても命令出来るんだよ。

風袋を喉仏に結び付けて、『風よ、くすべれ！』って外から命令するの」

「凄い！ 凄いよ、風すっか！ あ、でも、風袋、大切な物じゃ」

「ボクのはあげられないけれど、柿ただちゃんに貸している予備の風袋。あれは正式な風袋じゃないし、どっちかというところ、具扱いなの。人助けの理由があれば、許されると思う」

風すっかは風袋を取りに飛んで行った。だいちゃんはそれを見送りながら、仲間がいるって何て心強いんだ…、って思った。

だいちゃんがしばらく待っていると、風すっかが小さな風袋を抱えて戻って来た。

「はい、風袋、上手く役に立つといいんだけど」

「ありがとう、きっと大丈夫だよ」

「じゃあ、ボクは海豹達にカシラの口の開け方が変わる事を、知らせて来るね」

風すっかは再び飛んで行き、だいちゃんはまた海に飛び込んだ。

カシラは口を開け、待ちかねたタツノオトシゴが、いそいそと近寄って来た。

「早かったな、飴玉は？ おお、それか、奥歯で砕いた後、食っちゃおう。それから出る方法考えなきゃな」

「それなら、もう…」

だいちゃんは風袋を見せて、タツノオトシゴに説明した。

最初、胡散臭そうだったタツノオトシゴの顔が、段々に緩んで、笑顔になった。

「スゲエ、スゲエ！だいちゃん、空を飛べる友達いるんだあ！ オイラも頼めば空を飛ばしてくれるかなあ？」

「きっと一緒に連れて飛んでくれるよ。風すっかは、とってもしっかり者で優しいんだ」

タツノオトシゴは神妙な顔になって、だいちゃんを覗き込んだ。

「ねえ、だいちゃん達は冒険の旅をしているんでしょ」

「うん、冒険なんて大袈裟な物じゃないけれど」

「オイも…、ちょっとだけ一緒に行っても良いかな？ オイラの居場所を見付けるまで」

「うん！ 僕は歓迎、風すっかも柿ただちゃんも、きつと友達になれると思うよ」

二人は協力して風袋を喉仏にしっかりと取り付けた。

「風よ、くすべれー！」

だいちゃんが命令すると、風袋はもそもそと喉仏をくすべった。カシラの口がゆっくり開く。

「やった！ やったあ!!」

二人は手を取り合ってびよんびよん飛び上がった。

今度はだいちゃんが外へ出て確かめた。果たして外からも声は届き、風袋は反応して口は開いた。

その時、海の水がそれまでより少し冷たく感じたけれど、だいちゃんはあまりの気にしなかったの。それをずっと後悔する事になるんだけれど……。

青い実と飴玉を左右の奥歯に乗せると、上から歯が降りて来て、あんなに堅かった殻はきれいに真つ二つになった。甘酸っ

ぱい匂いのする黄色い果肉が、瑞々しく顔を見せている。

「さあ！ 行こう！」

だいちゃんは青い実を懐に入れ、タツノオトシゴを肩に乗せて、勢いよく外に泳ぎ出そうとした…時…!!。

「出るなー!!」

正面から若い海豹が突っ込んで来た。

しかし、それより一瞬早く、タツノオトシゴは、憧れの外界に泳ぎ出していた。

「わあ！ 外だ！ 外の世界だ!!。だいちゃん達と、冒険に出る…ン…ダ…アアアアア…」

だいちゃんの目の前で、タツノオトシゴは陽炎のようにかき消えてしまった。だいちゃんは何が起こったか分からず、息を呑んだ…途端、海の水を一杯に飲み込んでしまった。

がぼげぼげお~~~~?

気が付いたらだいちゃんは浜の岩場に引き上げられていた。海豹が数頭、心配そうに覗き込んでいる。海豹の老医師もいる。

「風すっかさんは青い実を友達に届けに行ったよ」

さっきの若い海豹が、シマシマ合羽をぎゅっと絞りながら言った。

「僕、どうして…？ あっ！ タツノオトシコは？ ねえ、タツノオトシコは！」

「お主が溺れたのは魔法が切れたせいじゃよ」

歳長けた一番立派な海豹が進み出て、だいちゃんの問題とは別の事を答えた。

「シマシマ合羽の魔法は、時間の止まったカシラの中なら保っていたのが、外界に出ると一気に時間が進み、一気に切れたのじゃ」

「え…、じゃあ…、タツノオトシコは…？」

「アしは、わしの曾爺さんが子供の頃よりずっと昔からあそこにおった。外に出て一気に時間が流れると……」

\*\*\*

何だか暖かい感じがして、柿ただちゃんは目が覚めたよ。気持ち悪くて苦しかったのがすっかり治っている。

「気が付いた？ 良かった！」

風すっかが覗き込んでいる。

「だいちゃんが凄く頑張ってくれたんだね」

だいちゃんは洞穴の隅で柿ただちゃんを見てにこっとした。

でも何だか元気がないのは、疲れているからなのかしら…？

柿ただちゃんは一生懸命頑張って回復した。

また三人で旅に出るその日、だいちゃんは鯨の骨の見える岬を出発点にした。

「ねえ、柿ただちゃん、僕の友達に名前を付けてくれる？」

「えー？ ただちゃんの知っている子？」

「ううん、知らない子。でも僕約束したんだ、柿ただちゃんに名前を付けて貰うって」

「ふーん、だいちゃんの約束なら大事だね。でも見た事もない子かあ……、どんな子なの？」

「小さくて、気が強くて、優しくて、飴が好きで……、夢を持っているの」

「……ふーん…、じゃあね、じゃあね、…『ほある』!!」

「ほ…ほある？」 風すっかが呆れた声を出した。

「うん、どこの言葉か忘れちゃったけれど、『大切なお友達』って意味なの。だいちゃんのお友達なら、ただちゃんの友達にもなってくれるかなあ？」

「き…き…き…」

だいちゃんは冷たい風に目をしばたかせながら言った。何日か前、岬の下の浜で海豹達とした会話を思い出しながら…。

\*\*\*

「わし等は、アしが外に出るとどういふ運命になるのかを、知っておった。だから、ワザとアしに冷たく、外の世界に憧れを持たせぬように振る舞った。おカシラ様に捧げ物をしたり、中に入る用事の時も、アしに話し掛けたりしないのは、暗黙の了解じゃった。皆、アしの為を思えばこそ……じゃった」

「なのに、僕は……僕は……」

「いいや、間違っていたのは、わし等の方じゃったのかもしれない」

「アしが、あんなに目を輝かせて、生き生きと嬉しそうな声を出せるなんて、知らなかったよ」

さっきの若い海豹が横から言った。風すっかから話を聞いて、慌てて一番泳ぎの早い彼が、カシラに向かったのだ。

「アしは、カシラの中でただヒネくれて、悠久の時を生きておったのじゃ。お主という友が出来て、ヒトを信頼し、未来を夢見て、アしはどれだけ幸せだったじゃろうな」

「でも、僕は、自分が正しい事をしたとはとても思えないよ」  
だいちゃんはうつむいて泣きそうになりながら言った。

「何が正しいかは誰にも決められん。ただ、お主が溺れた時、

カシラが泡を吹いてお主を海面まで押し上げてくれたそうじゃ

「……!!」

「カシラの意思是、お主を生かす事じゃった。今はその事で納得しておくのが良からう……」

\*\*\*

「だいちゃん、だいちゃんたら……!!」

柿ただちゃんがさっきからだいちゃんの裾を引っ張っている。風すっかはおう風袋に乗って、高く舞い上がっている。

「うん、行くつか」

だいちゃんは空を見上げてアムール河の上流目指して歩き出した。

後から柿ただちゃんが、もうシバしないよう、シマシマ合羽を固く巻き付けて、びよんびよん付いて行った。

くおしまい

二〇〇九・二・某

